

『nameless#02』テキスト01

※ 「付けをしているが、それがセリフなのかト書きなのかは現場で調整すること。

※ 演出解釈なしにこの戯曲を完成させることは出来ない。

「美しい、

と、

言った(た)、

傍から断ち切れる」

「紐ではなく、

紐ではなく、線、

紐、

線ではなく、電話のようでもなく、

線、紐、途切れる。

断ち切れる。

切れる。線。

繋がり、

——繋がった。

紐、紐、紐。

来る日も来る日も、断ち切れる。

いや、

【美しい】

と、言った(た)

傍から断ち切れる」

「紐ではなく、

——を切るように。

断ち切れる。

なかったことになる。

いや、そもそも、最初からなかった。

だから、再び、

思う。

美しい、

と、」

「言った傍から断ち切れる」

「縄でなく、——のように。
また切れる。

なかったように。

——初めからなかったのだ。(なかったのだ)

美しいとも思わなかった。

思ったとて、口に出さなかった。

から、なにも思わなかったのだ。

ザーザーザーザーザーザーザーザー。

縄ではなく、罠のように。

戦慄いて、断ち切れる。

戦慄いたのは、私ではなく、——であり、私ではなく、

罠にかかったのは私ではなく、

——である。

私は美しいと思わなかった。

思わなかった。

勝ったのは私であり、戦慄いたのは——である」

「——があった」

「——がノイズする」

『ザーザーザーザーザーザーザーザー』

「という、ノイズ」

「ノイズする、

罠にかかった——がノイズする。

美しいと言わなかった私に騙されて、断ち切れた繋がりには、電源を押すという罠にかかった——はノイズする。それは戦慄きの悲鳴であり、証明である。私は何も語らなかったし、美しいとも口にしなかった」

「——は映し出し、指先ひとつで鏡に変わる。

黒い鏡に、私は映し出され、美しいとは思わない。

前後の関係なしに、私は——に映し出される。

黒い鏡に幽閉される。

——の中に私は含まれる。

含んだのは口ではなく、——の内部だ。泣いている——の中に私は含まれる。

——はノイズする。

ザーザーザーザーザーザーザーザーザー。

それは泣き声である。戦慄きである。

震えている。——は震えて泣きし抱く。私を含んで泣いて抱きしめて、——の黒い画面に含まれる私は、泣いているのだろうか。

可能ならば泣いているのだろうか。

ならば私は泣いているのだろうか。

可能ならば泣いているのだろうか。

ならば私は泣いているのだろうか。

可能ならば私は泣いているのだろうか。

ノイズする」

「ザーザーザーザーザーザーザーザーザー」

「美しい、とも思えない、黒い中に私は入り込む。入り込んでいる。

ザーザー

——ノイズが取り囲む——ザーザー

ノイズが引きずり込む

ザーザーザー——私は黒い鏡面体の内部から、ソファに座っている和やかなアメリカ家庭を眺めている。

ザーザーザー。

彼らにとって私はただのエンターテイメントに過ぎないだろう。

ザーザーザーザーザー

コメデイだろうか、私は。サイコスリラーだろうか、私は。

私はノイズだ。ノイズから言語を発する。ノイズは言語である」

「黒い鏡面体から出ることが出来ない！ これは罠だ！」

「なあ、誰か、その赤いボタンを押してくれやしまいか。あるいは、おうちに帰るんだ！！
ゴム製の擦り切れた——ゴム製の安っぽい、ボタンだ。赤いボタンだ。電源ボタンは生来赤いものと相場は決まっているのだよ君！！ ホーム！ ゴー、ホーム！ 早く家に帰らなければ！」

君さ、賢そうなブロンドの坊や、青い目のお父さん、君さ。君は日曜日に決まって訪れるあの湖で釣りをするんだろうね。そうだろうね。アメリカンホームドラマの一風景として」

「知っているかい、知っていようさ。その異様さに目を向けないなんて愚かしいことは君に似つかわしくない。

君、君、君。

画面がスクロールする。

これはジョークだ。

おい、ジョージ、高らかに笑っておくれよ。

ジャックダニエルを飲みながら、ジョニーウォーカーの冗談みたいなタイツを履いて白州を注いで拍手をすればいい。私はご覧の通り搾取される真っ最中だ。

おいダニエル、それは釣り具じゃないと、お前の愚かしい息子にいい加減教育したらどうだ。

——これはジョークだ。ただのジョーク。冗談だ。

ノイズに等しい。

SHARPは素敵な夢を見せる。これは夢みたいなジョークだろう？

そうに決まってる。

・・・ジョークのついでだ。ザーザー——

驚いたことに、そいつのバッテリーは——ではなく、パナだ」

「すべての、——だ。

パナ。

パナ。

パナ。

すべての、すべての。

私はパナ——でできた黒い鏡の中の暗闇の中に突っ立て、赤いボタンを誰かに押してもらえるのを待っている。

罨にはまった、お笑いぐさの私に、その誰かよ、その私に向かって荒縄の一つでも放つてはくれまいか。スグに切れてしまうのでは困るのだ。私はパナSHARPの真っ黒い鏡の罨から抜け出さねばならない」

「しかし私は否定する。

私は鏡の中にはいない。

いや、いるだろう。

すぐそこにいる。

いない。私は見ている。

鑑賞している。

黒い画面に映る私を見ているのは私であり、私は罨にはまった私を鑑賞する。

私は私を鑑賞している。

おどけたブロンドの坊やが赤毛のあの子にキスをするのを眺めている。

私は私を鑑賞している。

感傷に浸りながら？

いいや、何の感情も思い浮かばない。この鑑賞は私の感情に干渉しない。感化されることもない。海岸沿いのガイドラインには人っ子一人いない。

私は私を鑑賞している。

夕暮れに立つ私は、

夜の街に立つ私は、

ベーコンエッグを口にする私は、

書類仕事をする私は、

・・・いいや、私は確かに鏡面の画面の中に含まれている。

畏に落ちた私は、事切れた様子で、ただ、電源ボタンを繰り返し押すことしかできない」

『ザーザーザー』

「——の画面に何かが映し出されたら、それはきっと教育番組だ。そうではなくてはならない。

押し出される。着ぐるみの黄色と耳の短いウサギのような、死んだ目の、ぬいぐるみに、押し出される。あと、子供だか何だかに。

そうして、私は元のソファに腰かけている。

そうして、リモコンをもてあそんで、ついたり消したりを繰り返す。

1、2、1、2、1、2・・・

子供、着ぐるみ、子供、着ぐるみ、レオタード、着ぐるみ、子供、レオタード・・・

その繰り返しだ。

平日の夕方に相応しいローテーション。

広告の無い幸福。

含みの無い番組。

組み合わせは決まっている。

子供、着ぐるみ、子供、着ぐるみ、女子アナウンサー、着ぐるみ、アニメ、女子アナウンサー、着ぐるみ、女子アナウンサー・・・」

「ああ、これはおそろしく幸福だ。

完璧なローテーション。ワイドショーに煩わされることもない。クッキーを食べよう。

戸棚にあった、美味しいやつを。

『くだらない番組ばかりだ、この世の中』

くだらなくはない。労働力として番組を生産するのは大変効率的だ。多くの企業が

かわり、多くのスタッフが働く。経済活動だ。くだらない番組なんか何一つありはない。だから、1:2:の繰り返しではなく、民放にもキチンと目を向けなければならない。それが我々一般視聴者に課せられた義務。これはつまり経済活動なんだ！」

「電源を消せばすべて事切れる。

黒い鏡面と向き合う今日は脅迫めいたため息を、私に向かつてはき捨てる。

捨てる。捨てる。

何を。切れる。

切れた。アメリカのブロンド。

違う。切れた。

——の家。赤いボタンは擦り切れている。

・・・ああ、まただ。また毘だ。

ひと時たりとも気が休まらない。休まったことなどない。どこにもない。

私の安らぎなど、切れた瞬間に終わってる。

美しいと言った傍から事切れる。

何度も付けては消してを繰り返す」

「私の眼球は——である。——は映し出す。こんな至近距離で画面を眺めては目を悪くする。視神経が途切れる。伝達機能がマヒする。水晶体がすり減っている。瞳孔が開き、否が応でも君が見える。

いつだって、

——君が見える。

君は美しい。君は美しい。君は美しい。

君を映し出し、君は美しい、君は生み出され、君は美しい、君は慈しみ、君は染み出し、君ははみだし、君は裸足、君は果たして、君は果てなく、君は泣く、君は苦しみ、君は染み付く、君は住み着き、君は着替える、君は演じて、君はしていた、君は抱いた、君はいた。

美しい美しい美しい君、映し出し美しい生み出され美しい慈しみ染み出し、はみ出し裸足、果たして果てなく泣く君は苦しみ染み付き住み着き着替える。君は演じてしていた。私は、抱いた。

君は、いた。

ザーザーザーザ——」

「——が家に帰れば、君はいなくなる。

ドアを閉めればいなくなる。

瞼に焼き付いている懐かしの我が家はどこにある？

まるでジョークだろう？これは所詮TVショーのようなモノだ。経済活動の一端に過ぎない。

ない交ぜになった私の眼球はいつでも君を探す。落ちる。真っ暗な鏡の中。

ここにもいない

あそこにもいない

どこにもいない

いるはずもない

いるわけがない

ようこそと、そのベルを押したんだ君は。

何度も押してくれたんだ君は。へい、ジョーイこれはなにかの冗談だろうか？

そうさ、きっと冗談だ

ザーザーザーザーザーザー

「ウイスキーはバーボンで、アメリカのホームドラマ。

湖の風景。

海岸沿いの釣りをしよう。

赤毛の女の子にキスをするんだ。

日本の教育番組は退屈さ。

民法にしたって変わらない。

アナウンサーとクイズ番組しか映らない。

これは単なる企業戦略だ。

所詮は企業戦略の一端だ。まともな経済活動。

当たり前だ。そんな限られたものでしかこの社会が動かないなんて馬鹿なことがあるか。

クレジットカードで買ったよ。

君の勧めで買った。

付けて消して、それだけだ。

君は付けばいい。

消せばいい。

だれもない。

付けばいい。

これは罠だ。

戦慄しているのは私である。

美しいと言った傍から断ち切れる。

美しいは電源である。

オン、そして消える。

オフ、そして現れる。

美しいと、黒い鏡面にキスをする。

君はそれをひどく嫌がるんだ。

そんなことをするのは気持ちが悪いつてさ。

バカにしている。いつも君はバカにする。

コードを切れ。私がやる。

君には出来っこない。

けれど、それは君がやるんだ。

君は美しいという罍を私に投げかける。

——を叩き割る。

割る。悪いが割る。君は言った。

どうかやめてほしい。

チャンネル争いをしよう。

どんなクイズ番組も、所詮は答えを求めるバカみたいな遊びだ！

あのアナウンサーはディレクターの嫁と関係を持っている。

バカバカしいバカバカしい。

・・・美しいよ。

君は美しい。

これは罍さ。所詮は消えていく。ついては消えていく。潰えていく。

疲労さ。疲れている。拾った疲労を披露して見せようか。広げてみても何にもないが」

「ザーザーザーザーザーザーザーザー

何かを、説明する気なんてないよ。

ただ、毎度消えて、毎度現れる君に、僕はもううんざりなんだ。

だから、消えてほしい。僕の前から消えてほしい。消えても、また現れるんだろう？

わかってる。

全部わかってる。

ザーザーザーザーザー

知ってる。全部知ってる。

こんなもの。

紐を、いや、コードを、切って。

おしまいだ。

君はいなくなる。

さようなら。家に帰ろう」